

# 朝鮮在来稲の特色

—資料『朝鮮稲品種一覧』による実証分析—

穂 本 洋 哉

1. 研究のねらい
2. 朝鮮在来稲の一般的特徴
3. 京畿道における在来稲の分析
4. 結語

## 1. 研究のねらい

本稿は、朝鮮総督府の調査資料『朝鮮稲品種一覧』（朝鮮総督府勸業模範場、大正2年）に基づいて行なった、朝鮮在来稲の特性に関する分析結果である<sup>注1)</sup>。日本では、近代以降、人口が急増し、また、明治工業化と都市化の進展、さらに農業技術（明治農法）ポテンシャルが低下し、米不足が深刻化した（大正7年「米騒動」）。これを受け政府は、大正9年に、朝鮮における「産米増殖計画」を実行に移した。政府は、すでに総督府施政開始（明治43年）以前＝統監時代（同39年）から日本稲の朝鮮移植を念頭に、半島における米の増産計画を進めていた。上記『朝鮮稲品種一覧』（以下、『一覧』）は、日本稲移植計画に資する目的の下に実施された、「各道府郡ニ委嘱シテ蒐集シタル朝鮮産在来水陸稲品種」<sup>注2)</sup>の特性に関する一斉調査であった。調査は、各道府郡毎の水稲（粳・糯）・陸稲（同）数の別、各稲の熟期、芒の有無、芒の色、稈の色、粒付、粒の大小、耐旱力、作付歩合の項目に亘ってなされた。調査が朝鮮全土に亘り、作付が僅少の稲に至る全稲品種について統一規準の下でなされた点で、優良品種（＝日本品種）導入直前の朝鮮在来稲を知る上での貴重な情報源と言えよう。朝鮮総督府は、同調査以外にも、毎年、朝鮮稲と日本稲との「比較試験」の実施とその成績結果の報告を義務付け（総督府「勸業模範場報告」、各道「種苗場報告」、地域毎に優良品種の普及の参考とした。普及の対象となる”優良品種”の大半は日本稲で占められていたが、冷涼な地や劣悪な水利条件下の地では、反って、耐寒性、耐旱性に優れた結果を残した朝鮮在来稲の方が普及品種として奨励される場合もあった<sup>注3)</sup>。総督府による在来稲の特性調査が断続的にはあるがその後も続けて行なわれたのは、そうした理由からであったものと考えらる。

”優良品種”普及は、施政開始後僅か20数年の間に、全鮮水稲作付面積の稲の8割以上にも及んだ

が、その徹底振りは、総督府勸業模範場を頂点とする系統的普及組織：模範場（本場）－各出張場（後に支場）－各道種苗場体制、の確立に依る処が大きい。また、その組織化が、我が国明治以降の農事試験場体制の朝鮮”再版”であったことについてはすでに前稿で詳説したところである<sup>注4)</sup>。

本稿は、『一覧』記載13道の内、とくに、朝鮮半島西岸中央部に位置する京畿道38府郡に登場する水稻粳種350種の特性分析を行ない、日本稻普及以前の朝鮮稻作の実態を品種面から明らかにしようとするものである。朝鮮在来稻についてはこれまでも紹介されているが<sup>注5)</sup>、いずれも半島全域に亘る概略的な特色を述べるに止まり、道ないし郡段階までに掘り下げて稲の各特性に言及した報告は少ない。末端レベルまで掘り下げて得られる新たな知見から朝鮮在来稻作の特質を明らかにし、改めて、”朝鮮稻作史像”を再構築し、日本稻作との比較を試みるのが本稿の狙いである。朝鮮稻作と日本稻作の特質の相違が何に由来するのか、今後、京畿道以外の地域にも分析を広げて解明を行なっていく予定である。本研究をそのための一助としたい。

日本の稲作の特質が、藩政時代の早い時期から、土地生産性上昇を志向した集約型稲作であったことは周知の事柄である。反収向上のための、狭小耕地への労働、資本の集約的＝大量投入：多肥・多労化、灌漑施設の高度化と、それらに相応する農業技術の開発・蓄積：多肥・多収品種の改良、と栽培管理の徹底（種苗管理、耕起法の改善、肥培管理、水管理、除草作業）は、近代に入って「明治農法」として集大成されたが、かかる”集約性”は、朝鮮稲作では、どのような展開を辿っていたのだろうか。また、農業・農法の特質については、それぞれの地域の気象や地勢等の自然条件の外に、農業生産要素賦存状態（とりわけ、土地と労働＝人口）の相対関係が重要な影響を与えていたとの観点から、特定された朝鮮稲作技術のタイプを規定した要因に関しても、若干の言及を加える予定である。

注1) 筆者はすでに、朝鮮総督府が行なった諸種の農事調査、農事試験結果報告書を資料として、朝鮮在来稲に関する全般的考察を行なっている：穂本洋哉「朝鮮半島の稲作と日本の農業近代化政策」東洋大学『経済論集』第33巻2号、2008年）。

注2) 『朝鮮稲品種一覧』（緒言）。

注3) 穂本「上掲論文」p. 168～169。

注4) 穂本「同上論文」p. 171。

注5) 朝鮮総督府農事試験場『式拾五周年記念誌』（上巻）p. 28、菱本長次『朝鮮米の研究』（千倉書房、1938年）第4章第1節、鮮米協会『鮮米協会十年誌』（1935年）第5章、嵐嘉一『日本赤米考』（雄山閣、1974年）pp. 245、249。

## 2. 朝鮮在来稻の一般的特徴

### ①稲の種類

- ・資料『一覧』の全道（京畿道を含む13道）郡に登場の稲数の合計は、表1に示した通り、延べ（各道・郡登場の同名稻をも含めて勘定）3,792種であった。この内、水稻は3,486種で、全稲数

朝鮮在来稲の特色

表1：稲の種類一覧（道別）

（ ）内は百分比

	水稻粳	水稻糯	陸稲粳	陸稲糯	合計
京畿道	350 (56.7)	179 (29.0)	61 (9.9)	27 (4.4)	617 (100)
忠清北道	187 (64.9)	91 (31.6)	6 (2.1)	4 (1.4)	288 (100)
忠清南道	358 (66.4)	155 (28.8)	15 (2.8)	11 (2.0)	539 (100)
全羅北道	196 (62.2)	107 (33.8)	10 (3.1)	3 (0.9)	316 (100)
全羅南道	264 (65.5)	92 (22.8)	32 (8.0)	15 (3.7)	403 (100)
慶尚北道	294 (61.9)	151 (31.8)	20 (4.2)	10 (2.1)	475 (100)
慶尚南道	190 (65.7)	84 (29.1)	11 (3.8)	4 (1.4)	289 (100)
江原道	153 (65.7)	74 (31.7)	2 (0.9)	4 (1.7)	233 (100)
黄海道	83 (64.3)	40 (31.0)	5 (3.9)	1 (0.8)	129 (100)
平安南道	123 (58.6)	40 (19.0)	31 (14.8)	16 (7.6)	210 (100)
平安北道	123 (71.9)	35 (20.5)	7 (4.1)	6 (3.5)	171 (100)
咸鏡南道	64 (72.7)	19 (21.6)	3 (3.4)	2 (2.3)	88 (100)
咸鏡北道	28 (82.4)	6 (17.6)			34 (100)
合計	2,413 (63.6)	1,073 (28.3)	203 (5.4)	103 (2.7)	3,792 (100)

の9割強（92％）を占めていた。陸稲は、全稲数の1割（8％）であった。

道によっては、京畿道（14.3％）、全羅南道（11.7％）、平安南道（22.4％）のように、陸稲の割合が多くなっているところも見られていたが、これらを除くと、陸稲数は平均して、5％前後に過ぎなかった。

次に、『一覧』登場稲数の粳・糯別の内訳を見ると、全道平均の比率は69：31であった。この比率は、水稻、陸稲別でもほとんど変わっていない。いま、これを水稻種について道別に示すと、表2の如くである。粳米の割合は、半島中・南部の諸道で65％～70％とやや低く、北部諸道で75％～

表2：粳・糯構成比（水稻）

（ ）内は百分比

	水稻粳	水稻糯	合計
京畿道	350 (66.2)	179 (33.8)	529 (100)
忠清北道	187 (67.3)	91 (32.7)	278 (100)
忠清南道	358 (69.8)	155 (30.2)	513 (100)
全羅北道	196 (64.7)	107 (35.3)	303 (100)
全羅南道	264 (74.1)	92 (25.9)	356 (100)
慶尚北道	294 (66.1)	151 (33.9)	445 (100)
慶尚南道	190 (69.3)	84 (30.7)	274 (100)
江原道	153 (67.4)	74 (32.6)	227 (100)
黄海道	83 (67.5)	40 (32.5)	123 (100)
平安南道	123 (75.5)	40 (24.5)	163 (100)
平安北道	123 (77.8)	35 (22.2)	158 (100)
咸鏡南道	64 (77.1)	19 (22.9)	83 (100)
咸鏡北道	28 (82.4)	6 (17.6)	34 (100)
合計	2,413 (69.2)	1,073 (30.8)	3,486 (100)

表3：朝鮮における水稻粳・糯および陸稻の生産状況（明治43年）（ ）内は百分比

	粳	糯	陸稻	合計
作付面積（町）	1,255,309 (92.8)	83,698 (6.2)	13,788 (1.0)	1,352,795 (100)
収穫高（石）	9,725,072 (93.5)	582,601 (5.6)	97,940 (0.9)	10,405,613 (100)
反収（石）	0.775	0.696	0.710	0.769

『鮮米協会十年誌』（鮮米協会、昭和13年）p.42。

82%と高くなっている。その分、南部諸道で糯米が多く、北部で糯米が少ない傾向にあったことになる。ただし、これらは栽培稲名の粳、糯別出現回数の内訳であり、両者の作付比率や生産高比率をそのまま示すものではない。そこで、『一覽』調査とほぼ同時期である明治43年の朝鮮全土の稲の粳・糯別比率を見ると、表3の如く、水稻糯種の比率は5.6%（収穫高）、6.2%（作付面積）に過ぎなかったことが判明する。表2に示された17%台～35%台（平均30.8%）という稲出現回数ベースでの糯種の多さは、したがって、弱小の稲が糯種には極めて多かった（＝土地面積に対して数多くを、小規模に栽培していた）ことを示したことになる。実際、『一覽』に登場する各道の郡別の各稲「作付歩合」の項には、ほとんどの糯稲について、1パーセント未満を意味する「僅少」と記録されている。こうした点を踏まえて、改めて、半島南部において糯種が多く記録され、北部で少なかった点に立ち返ると、その背景として、糯種の植生上の地域性の外、飯用・酒造用である粳種に対して糯種は、各郡（各農家）がそれぞれ自家加工用として小規模に栽培していたが、そうした自家用に加え、都市部を多く擁する南部諸道では販売加工用としての糯米に対する需要が発生していた、との推測を生む。なお、朝鮮における糯種の生産は、「産米増殖計画」の実施に伴い米の全生産高が急増する中で、糯種の生産には大きな変化は見られず、結果として、糯種の米生産全体に占める割合は昭和8年時で1.7%（生産高ベース）と急速に縮小した<sup>注6)</sup>。これは、「増殖計画」が、不足する日本内地飯用＝粳米の充足を主目的としていたからに外ならなかった<sup>注7)</sup>。

## ②稲の早晩

朝鮮半島全体における早、中、晩稲数の構成比は、表4の通り、順に、27.4%、40.4%、32.2%であった。数の上では、熟期の「中」の稲（中稲）を中心に、「晩」、「早」がそれに続く。これを地域別に見ると、半島西岸中央部に位置する京畿道で、熟期の構成比は早（29.6%）、中（35.2%）、晩（35.2%）と、熟期の早い稲の数がやや少ないものの、3者相均等していた。3割が早生、残り7割を中・晩同率（3割5分）で2分する恰好になっている。この構成比は、京畿道の北西に隣接する黄海道でもほぼ似通っていた。

次に、朝鮮半島の南北、またその東岸と西岸とでは気象条件、地勢条件が大きく異なることを考え、いま、半島を東西に分け、さらにそれぞれを北部、中央部、南部に区分して熟期の早晩を見ておこう。まず、半島西岸地域（平坦部が多い）では、早生の稲数の比率は25～30%の範囲内にあり、目立った地域差は南北間はない。これに対して熟期の晩い稲は、北部でその数が多く、南部ほど少

朝鮮在来稲の特色

表4：品種の早晩別稲種数および同比率（道別）

	早	中	晩	合計	早 (%)	中 (%)	晩 (%)	合計
京畿道	86	102	102	290	29.6	35.2	35.2	100
忠清北	32	78	33	143	22.4	54.5	23.1	100
忠清南	75	125	104	304	24.7	41.1	34.2	100
全羅北	46	71	54	171	26.9	41.5	31.6	100
全羅南	66	94	69	229	28.8	41.1	30.1	100
慶尚南	40	62	56	158	25.3	39.2	35.5	100
慶尚北	73	111	71	255	28.6	43.5	27.9	100
江原道	48	41	35	124	38.7	33.1	28.2	100
黄海道	20	23	22	65	30.8	35.4	33.8	100
平安南	22	30	31	83	26.5	36.1	37.4	100
平安北	17	47	31	95	17.9	49.5	32.6	100
咸鏡南	12	12	21	45	26.7	26.7	46.6	100
咸鏡北	2	1	6	9	22.2	11.1	66.7	100
計	539	797	635	1,971	27.4	40.4	32.2	100

ない傾向にあったことが判る。耐冷性の稲が少なかったこの時代、我が国の藩政時代の場合もそうであったが、春冷のために挿秧が遅れ、また、夏季の冷涼な気候と早い秋冷のために登熟が長引き、晩い熟期に至ったことがその理由であったと思われる。

こうした傾向は半島東岸でも確認できる。朝鮮における稲作の北限地域と考えられる咸鏡北道で熟期の晩い稲数の比率は66.7%、咸鏡南道で46.6%と、寒冷な気象条件を反映して、その傾向はいつそう顕著であった。中生の稲種数については、全体として、南部ほどその割合を高くなる傾向が確認できる。南部では、晩生の割合が低くなるため、その分中生の稲が多くなっていた。

総じて、熟期の早い稲については、地域差は少なかった。地域間の変異は、稲種数の大半を占める熟期のより晩い中・晩生の構成比に見られていた。北部には晩熟の稲が多く見られ、その比率は南下するにしたがい減少する。南部では、代わって、中熟の稲種が多くを占めるようになっていた。耐性の強化とその純系淘汰への取組みが不十分であったこの時代、気象条件、地勢条件は、稲の熟期を直接に左右する要因であったにちがいない。我が国に比して格段に厳しい北部の気象条件（春

表5：半島西岸部の早晩別稲種構成比

		早	中	晩
北 部	平安北道	17.9%	49.5%	32.6%
	平安南道	26.5%	36.1%	37.4%
中央部	黄 海 道	30.8%	35.4%	33.8%
	京 畿 道	29.6%	35.2%	35.2%
南 部	忠清南道	24.7%	41.7%	34.2%
	全羅北道	26.9%	41.5%	31.6%
最南部	全羅南道	28.8%	41.1%	30.1%

表6：半島東岸部の早晩別稲数構成比

		早	中	晩
	咸鏡北道	22.2%	11.1%	66.7%
	咸鏡南道	26.7%	26.7%	46.6%
中央部	江原道	38.7%	33.1%	28.7%
南部	慶尙北道	28.6%	43.5%	27.9%
最南部	慶尙南道	25.3%	39.2%	35.6%

冷、早秋冷)が稲の登熟の遅延に大きく影響したものと考える。また、東海(日本海)からの冬季の季節風に曝され、峻立した嶼壁が海岸線に迫る地形の多い半島東岸でこの傾向はいつそう強く顕われていたと言えよう。

注6)『鮮米協会十年誌』pp.42~43。

注7)我が国は、台湾から糯米を移入することが多かった(菱本『前掲書』p.715)。

### 3. 京畿道における在来稲の分析

以下は、京畿道に焦点を当て、府・郡レベルまで対象を掘り下げた分析結果である。

#### ①稲名にみる在来稲(京畿道)の特徴

『一覽』(京畿道38府郡)に登場する稲数は延べ617種(水稻粳350種、同糯179種、陸稻粳61種、同糯27種)に及んだ。この中には複数の郡に共通して登場する同一の稲が数多く含まれており、また、異名同種の稲も相当数に及んでいたから、実際の稲種数はこれよりも少ない、100種余りである。しかし、それでも、1地域の稲数としてはかなり多い数であることに変わりはない。当時、朝鮮では、極めて多種雑多な稲が栽培されていたことになる。いま、この点を水稻粳種について示すと、表7の如くである。こうした多数の稲の存在はこの時代の稲作が、品種面において、その改良がなお試行錯誤の段階に留まり、品種間で淘汰が十分に進まず、未分化・不統一・未整理の状態に置かれていたことを物語る。こうした状況は、我が国藩政時代の事情に酷似していると言えよう。

#### ア：地名を冠した稲名の多さ

稲名の多さは、稲の統一的な分類基準が当時存在していなかったことに一因があると考えられる。品種としての確たる基準の欠如が、同種もしくは同系にありながら、地区(道・府郡)によってその呼称を異にして記録される結果を齎すこととなる。かかる分類基準の欠如は、第1に、その呼称に地名を冠した稲が多く見られていたことに端的に顕れている。いま、『一覽』(京畿道38府郡)で確認できる地名稲種を挙げれば、以下のようである。

水原稲、始興稲(京畿道)、忠清稲、淳昌稲(全羅北道)、白川稲(黄海道)、慶尙稲、春川素稲(江原道)、江陵稲(江原道)、原州石稲(江原道)。この外に所在が特定できないが、玉山、斗陵、白石、蒙實、鉄原、徳石も地名品種の可能性が強い。

朝鮮在来稲の特色

表7：資料登場の水稲梗種一覧および出現頻度（京畿道）

稲名	出現回数	稲名	出現回数	稲名	出現回数	稲名	出現回数	稲名	出現回数
趙同知稲	27	縮項稲	3	玉字杭稲	1	始興稲	1	クイタリ	1
老人稲	20	水稲	2	央分橋稲	1	仰増稲	1	短項稲	1
多多稲	20	猪稲	2	山五例稲	1	密多利稲	1	鉄早稲	1
麦稲	20	紫光稲	2	加摘稲	1	端赤稲	1	雇傭稲	1
豆稲	11	晩稲	2	忠清稲	1	氷多多稲	1	黒稲	1
野充稲	11	毛化稲	2	新種稲	1	王月白稲	1		
紅稲	9	早稲	2	雉稲	1	多毛白稲	1		
精根稲	8	山多多稲	2	痕多稲	1	青白稲	1		
玉山稲	7	白石稲	1	半荒稲	1	毛緑稲	1		
白稲	6	中租	1	妙鉢稲	1	白川小禾	1		
時不知稲	5	晩稲	1	白荒稲	1	白川黍稲	1		
銀多多稲	5	水原稲	1	赤稲	1	一稲	1		
荒稲	4	正稲	1	骨文稲	1	丁升稲	1		
七升稲	4	山狗	1	三穂稲	1	長毛稲	1		
斗充稲	4	鉄原稲	1	石稲	1	難稲	1		
戊戌稲	4	背稲	1	黄慶稲	1	西禾稲	1		
粳糯稲	4	宗穿稲	1	一茎稲	1	髯紅稲	1		
象毛稲	3	雌精根稲	1	白達稲	1	早禾	1		
旺達稲	3	黄岱稲	1	山多利稲	1	黒月稲	1		
束稲	3	称察稲	1	西海月利	1	玉精稲	1		
宗禾稲	3	作達稲	1	老郎稲	1	在来稲	1		
呂實	3	葱々稲	1	壮士稲	1	小麦稲	1		
斗陵稲	3	淳昌稲	1	山月里稲	1	妙心稲	1		
大関稲	3	山早稲	1	ブユンオベ	1	紅精稲	1		
紅豆稲	3	ヌクタイ	1	暮稲	1	四時稲	1		
好爛稲	3	ヌナニ打	1	中稲	1	雑稲	1		
倭稲	3	次早稲	1	項長稲	1	旺充稲	1		
紫来稲	3	毛患稲	1	玉老人稲	1	山櫻稲	1		
青稲	2	徳石稲	1	原州石稲	1	毛理稲	1		
慶尚稲	2	座上稲	1	倭野充稲	1	白川素稲	1		
白川稲	2	毎患稲	1	豪實稲	1	石麦素稲	1		
黄稲	2	白大占今	1	冷稲	1	春川素稲	1		
倭山稲	2	山頭稲	1	白山稲	1	江陵稲	1		
堤過稲	2	ヌシンモリ	1	荒充稲	1	項不出稲	1		
毛農稲	2	北青稲	1	僧稲	1	栗稲	1		
銀稲	2	三変稲	1	十稲	1	雇稲	1		
火稲	2	倭山豆稲	1	早稲	1	仁稲	1		
順稲	2	甫銀稲	1	外大稲	1	山多多稲	1		

当然ながら、京畿道外の地名を冠した稲が多い。他道で栽培されていた稲の内、おそらくは当該地での普及品種が伝わったものとする。当時の品種の地域間交流の一端を伝えているが、稲名が特定されていないことに品種に関する情報の不徹底さが窺える。

地名稲種として、上記以外に、日本起源の稲と思われる「倭稲」が資料に散見される（4種：倭

稲、倭山稲、倭山豆稲、倭野充稲)。伝来の経緯は不明だが、在来稲として記録されているところから、来歴の時期はかなり古いものと想像する。この外、同じく日本稲と思われる「大関稲」が1例登場しているが、こちらの方は日本の近代以降の改良品種であることから、朝鮮に普及してまだ歴史は浅いものと考え。「水原稲」(京畿道水原には、統治下の日本の農事試験場の本場が置かれた)も、あるいは、「大関稲」同様、統監府施政開始前後の所謂「優良品種」(日本による普及のための選定品種)の”走り”であった可能性がある。

#### イ：稲の形状、色状に起因する稲名

芒＝毛の有無、穂・稈・項および稲の色状に関わる稲名が多く見られたことは、この時の稲には、なお様々な形状・色状を有する稲が多かったこと、換言すれば、淘汰が十分進んでおらず、品種(特性)上の分化は未だ不徹底であったことを物語る。『一覧』(京畿道38府郡)登場の当該稲名を掲げておこう。

##### 形状に起因する稲名

毛：象毛稲、毛農稲、毛化稲、毛患稲、多毛白稲、毛緑稲、長毛稲、髯紅稲、毛理稲。

禾：宗禾稲、早禾稲、西禾稲、白川小禾。

項・茎：縮項稲、項長稲、項不出稲、短項稲、一茎稲。

##### 色状に起因する稲名

紅豆稲、髯紅稲、紅精稲、白稲、白荒稲、白達稲、白山稲、多毛白稲、紫来稲、紫光稲、青稲、青白稲、黄稲、黄岱稲、銀稲、甫銀稲、黄慶稲、赤稲、端赤稲、毛緑稲、黒稲、黒月稲。

#### ウ：稲の特性に起因する稲名

地名や稲の形状の外、稲の早晩、耐性の程度、稲の品位の程を窺わせる稲名も見受けられる。いずれも稲の特性に関わりを持ち、地名や形状による区分けと比べ、こちらの方がより品種上の分類基準に近いものとなっている。

早晩：早稲、山早稲、次早稲、早禾稲、鋏早稲、中租、晩稲、暮稲。

耐冷性：冷稲。

耐病虫害：難稲、痕多稲、毎患稲。

耐湿地：水稲。

印度型：僧、占。

その他：時不知。

#### ②主要品種の登場と品種群成立への動き

多種・雑駁なる稲種にありながらも、一部では、有力品種の登場に象徴される品種上の分化と特定品種を中軸とした品種群成立への動きが見られていたことも留意しておくべき事柄である。

ア：出現回数

既述したように、『一覧』（京畿道38府郡）記載の水稻梗種の合計は350例に及んでいた。これは各郡毎に記載された稲数を単純に合計したものであり、したがって、複数の郡に跨って登場する稲も重複してカウントされている。表8はそうした稲（全稲名は既出の表7に表示）の内、出現回数が5回以上（京畿道38郡府中、5郡府以上に跨って登場）の稲12種を取り出したものである。

表中、もっとも出現回数の多い「趙同知稲」は、京畿道38郡府中27郡において作付られていた。次いで20郡で栽培されていた「老人稲」、「多多稲」、「麦稲」が並ぶ。やや出現頻度を下げて11郡登場の「豆稲」、「野充稲」、その後に「紅稲」（9郡に登場）、「精根稲」（8郡に登場）、「玉山稲」（7郡に登場）が続く。これらの稲、とくに20郡府以上に亘って作付けられた上位4種は、京畿道の代表的な品種であったことになる。

ところで、稲名から判断して同系と思われる稲種を拾い出せば、表9の通りである。稲の早晚、形状、色、その他特性等によって同一種と考えられた、この時代の系統種と見てよいであろう。多種の稲にも、有力稲種（出現回数が際立って多い）を軸に、いくつかの系統が存在していた様子が窺える。

一方、『一覧』各稲特性記載欄備考には、勸業模範場による観察結果として、各道各郡府の稲につき、それに類似する稲がある場合には、その類似稲の名を掲げている。京畿道についてそれを示

表8：『一覧』（京畿道）5回以上出現の稲

稲名	趙同知稲	老人稲	多多稲	麦稲	豆稲	野充稲
出現回数	27	20	20	20	11	11
稲名	紅稲	精根稲	玉山稲	白稲	銀多多稲	時不知稲
出現回数	9*	8	7	6	5	5

\* 「赤稲」（「紅稲」の別名を含めると10例）。

表9：同系統品種一覧（京畿道）

（ ）内は出現回数

					合計
野充稲 (11)	倭野充 (1)				12
多多稲 (20)	銀多多 (5)	山多多 (3)	水多多 (1)		29
紅稲 (9)	赤稲 (1)	髻紅 (1)			11
倭稲 (3)	倭山稲 (2)	倭山豆 (1)	倭野充 (1)		7
紅精稲 (1)	玉精稲 (1)				2
宗禾稲 (1)	西禾稲 (1)	早禾稲 (1)			3
豆稲 (11)	紅豆 (3)	倭山豆 (1)			15
荒稲 (4)	半荒 (1)	白荒 (1)			6
白稲 (6)	王白 (1)	多毛白 (1)	青白 (1)		9
白川稲 (6)	白川小末 (1)	白川黍 (1)	白川素 (1)		9
麦稲 (20)	小麦 (1)	石麦 (1)			22

表10：類似品種（京畿道）

稲名	郡名	備考
中租	京城府	多多稲二類似ス。
白稲	楊州郡	多多稲二類似ス。
倭山稲	水原郡	玉山稲二類似ス。
豪實稲	龍仁郡	趙同知二類似ス。
山多多稲	〃	時不知稲二類似ス。
荒瀬充稲	〃	時不知稲二類似ス。
長毛稲	始興郡	多多稲二類似ス。
水稲	坡州郡	野充稲二類似ス。
在来稲	豊徳郡	趙同知二類似ス。
紅稲	高陽郡	別名赤稲ト云ウ。
倭稲	金浦郡	趙同知稲二類似ス。
鋏早稲	陽川郡	多多稲二類似ス。

せば、表10の如くである。

記載12例中、4種（中租、白稲、長毛稲、鋏早稲）は京畿道の有力稲種のひとつとされる「多多稲」に、また3種（豪實稲、在来稲、倭稲）は、同じく同道の有力稲種である「趙同知稲」に「類似ス」としている。この外残り5例の稲の類似種として名を連ねた「玉山稲」、「野充稲」も含め、いずれも、京畿道の有力稲種である。先の同系種の存在と併せ考えると、朝鮮在来稲種の雑駁なる中での、主力種を基軸とするいくつかの品種群が存在していたことを知る。

こうした類似稲種以外に、「趙同知稲」と「多多稲」は、既述した通り、同系の品種を多く有していたことから、両種は、まさしく、この地域の中核品種として存在していたものとする。「多多稲」の場合、類似種、同系種を含めると29郡府で作付されていたことになり、「趙同知稲」のケースでも、類似稲種を併せると32郡府での作付となる。それぞれ、道内殆どすべての郡で栽培されていたことになる。僅か1郡だけでしか栽培されていない200種（水稲梗350の6割弱）もの弱小品種が淘汰されることなく残されていたことと好対照をなす。この時代の品種構造の2面性を伝えるものとして興味深い。

ここで、糯種についても一言しておこう。『一覧』糯種の作付歩合を京畿道を例に見ると、登場179種の糯稲の内「作付歩合」の記載がない89種を除いた残り90種中、各郡で「作付歩合」1%以下の糯稲は66種（73.3%）を数え、したがって、1%を越える「作付歩合」を有する糯稲は僅か24種（26.7%）にすぎなかったこと、また、この24種の内、各郡で5%以上の「作付歩合」を記録す

表11：水稲糯種「作付歩合」内訳（京畿道）

作付歩合	16%	10%	8%	7%	5%	4%	3%	2%	1%	僅少
稲数	1	1	1	1	4	7	3	6	13	53
稲名	良品稲	象毛稲	時享稲	棗稲						

る糯稲は8種に止まっていたことが判明する。表11に示したように、最大の「作付歩合」を記録したのは16%の「良品糯」（高陽郡）、これに10%の「象毛糯」（陽城郡）、8%の「時享糯」（交河郡）、7%の「棗糯」（陽知郡）が続く。16%の「良品糯」、10%の「象毛糯」を除けば、いずれも「作付歩合」は低く、糯稲には大型品種はほとんど見られなかったことが特徴的である<sup>注8)</sup>。

また、粳種同様、多数・雑多な稲種が存在しながらも、糯種についても、数種の特定の稲が広範囲に亘って栽培されていた様子を知ることができる。すなわち、京畿道38府郡中、「象毛糯」は26回、24郡に亘って記録されていた。次いで、第2位に「良品糯」（出現回数16回）、「象糯」（同14回）、「雌雄糯」（同12回）、「猪糯」（同8回）、「變得糯」（同7回）が続く。道内の有力な糯種であったと思われる。この6種だけで登場糯数全体（延べ179種）の6割を占めていた。他方、1回だけ出現する稲種は48種を数えた。粳種同様、弱小の稲が淘汰されないまま、一部有力糯稲への傾斜があったことを窺わせる。

#### イ：作付面積比率

##### 各稲種の作付割合

『一覽』は、原則として、在来各稲の「作付歩合」を郡単位に記録している。表12は、この「作付歩合」の記載があった京畿道19府郡の有力品種（出現回数5回以上について、稲作面積全体の10%以上の作付を記録した稲）を取り出したものである。これによると、先に『一覽』に出現する頻度が高いとして有力品種とした稲の内、「多多稲」と「麦稲」の2種（ともに20郡に亘って『一覽』に登場した普及品種）は、作付割合から見ても、当時の主力品種であったことが判明する。すなわち、「多多稲」については、61%（安山郡）を筆頭に、50%以上の作付割合を記録する郡は5郡を数えた。また「麦稲」については、2郡（豊徳郡、開城）で90%以上の作付比率を、また別の2郡でも、それぞれ、59%、40%と高率を記録していた。

ところが、有力品種といえども、すべてが突出した作付割合を記録しているわけではなかった。最も出現頻度が高かった「趙同知稲」（出現は京畿道38府郡中27郡に及んだ）の作付割合は10郡で10%以上を記録したものの、各郡とも、極端に高い割合で同種の作付を行なってわけではない。10郡中2郡で作付割合は、それぞれ、55%（驪州郡）、38%（陽知郡）と高かったが、他の8郡では、20%（1郡）、15%（3郡）、12%（1郡）、10%（1郡）であった。また、京畿道の広域（20郡）に亘って栽培されていた「老人稲」については、10%以上の作付割合を記録する郡は、僅か3郡に止まっていた。同じく広域（20郡）に亘って栽培された「野充稲」に至っては、10%以上の作付を記録する郡は皆無であった。そもそも、作物の栽培において、それぞれの栽培ステージで発生する自然災害リスクを分散させるために作期や熟期、特性の異なる品種を組み合わせることは極く一般的であった。リスク分散の必要性の程度は過去に遡るほど大きかったはずである。その意味では、「麦稲」や「多多稲」のような特定の品種への全面的傾倒の方が異例であったと言うべき

表12：主力品種別作付面積比率（京畿道：同比率10%以上）

稲名	出現回数	作付面積比率（郡名）				
		趙同知稲	27	20%（楊州）	10%（水原）	15%（広州）
		10%（坡州）	12%（安山）	15%（高陽）	38%（陽知）	15%（陽城）
老人稲	20	20%（楊州）	12%（安山）	21%（交河）		
多多稲	20	59%（水原）	50%（南陽）	61%（安山）	17%（陽知）	50%（陽城）
麦稲	20	10%（楊州）	90%（開城）	91%（豊徳）	40%（通津）	13%（永平）
		57%（交河）				
豆稲	11	15%（広州）	20%（南陽）	11%（安山）		
野充稲	11	—				
紅稲	9	—				
精根稲	8	—				
玉山稲	7	—				
白稲	6	33%（京城）	12%（積城）			
銀多多稲	5	10%（陽城）				
時不知稲	5	—				

であろう。

#### 早晚別作付比率

リスク回避のために異なる品種を組み合わせる栽培する点を考慮し、ここでは、特定の品種への栽培集中度を知るために、各稲の作付比率を早晚別に見ておこう。表13は、京畿道における府郡単位の早晚別作付面積の内訳を示している。表中\*印は、府郡それぞれの中心作期を示し、作期をリードする稲の作付比率を最終欄に掲げてある。

表より、京畿道が「早」（2郡）および「晩」（5郡）それぞれに栽培を特化した地域を伴いつつ、基本的には、「中」稲を主体とした作付体系を採っていたことが判明するが、そうした各郡の特定熟期への傾斜が各郡とも、備考に記したように、わずか1、2種類の特定稲種への強い傾斜＝集中的栽培によってもたらされていたことを知る。例えば、水原郡の「晩」稲の全稲作面積に対する作付歩合は66%であったが、そのほとんどは、わずか1種の稲＝「多多稲」（晩）の作付によるものであった。「多多稲」の作付歩合は59%であったから、「晩」稲の作付の9割方は「多多稲」が占めていたことになる。同様に、「中」稲作付地区＝開城郡（全稲作面積に対する「中」稲作付歩合は95%）では、「麦稲」（中）が「中」稲の作付面積の95%を占めていた。同じく、「晩」稲作付地区＝驪州郡では「趙同知稲」が、また、「中」稲作付地区＝南陽郡では「多多稲」（中）が、さらに、「早」稲作付地区＝安山郡では「多多稲」（早）が、それぞれ、地区の作付体系を支える主導品種であった。通津郡（「中」稲作付歩合90%）の場合は「晩稲」（中）および「麦稲」（中）の2種が、相半ばして（作付歩合は、それぞれ、50%、40%）、同地区の「中」稲作付を維持していた。稲の特性＝早晚に注視するならば、数多くの稲種がある中で、多くの郡で、極めて限られた特定稲種への傾斜＝集中栽培が行なわれ、当該郡の作付体系を支えていた事実が明きらかとなった。

朝鮮在来稲の特色

表13：京畿道における早晩別水稻梗作付歩合（％）

	水稻 梗数	水稻作 付歩合 記録数	早	中	晩	早晩 不明	作付歩 合合計	*当該内訳における主た る稲種の作付歩合
京城府	19	8	33	47*	16	2	98	「白稲」33%
楊州	29	28	23	59*	12		94	「老人稲」20%
水原	24	21		14	66*	3	83	「多多稲」59%
開城	2	2		100*				「麦稲」95%
廣州	7	7		39*	15	僅少	54	「銀稲」20%
楊平	25	25	6	25	60*	1	92	「順稲」32%
驍州	8	8	2		82*		84	「趙同知稲」55%、「順稲」26%
南陽	4	4		55*	20	10	85	「多多稲」50%
坡州	11	11	12	47*	5		64	「西禾稲」43%
豊徳	9	9		91*			91	「麦稲」91%
安山	7	7	61*	12	25		98	「多多稲」61%
高陽	6	6	23	22	28		73	
通津	4	4	7	90*			97	「晩稲」50%、「麦稲」40%
永平	9	8	2	8	51*		61	「粳糯稲」38%
麻田	1	1				100*	100	「白川稲」100%
交河	3	3		82*			82	「麦稲」57%、「老人稲」21%
積城	7	7	74*	5	14		93	「白川小禾稲」65%
陽知	12	11	10	16	57*		83	「趙同知稲」38%
陽城	3	3	10	65*			75	「多多稲」50%

作付歩合は、水稻梗、同糯、陸稲梗、同糯合計作付面積に対する水稻梗の割合。  
水稻「作付歩合」記録稲数には「僅少」（作付歩合1%未満と思われる）も含む。

この早晩別検討に関連し、先に言及した京畿道の中軸品種である「麦稲」および「多多稲」について一言しておこう。「麦稲」は「中」稲作付地帯＝4郡（開城、豊徳、通津、交河の各郡）における中心的稲種であったが、各郡の「中」稲作付面積（全稲作付面積に対する作付歩合は、それぞれ、100%、91%、90%、82%）のほとんど（それぞれ、95%、100%、36%、70%）をこの「麦稲」1種で占めていたのである。「麦稲」は、同種が「早」稲地帯および「晩」稲地帯に主要稲種として登場していないことから、当時の文字通り、圧倒的な中生品種であったと見て間違いなさであろう。一方、「多多稲」は、「中」稲作付地帯である南陽郡および陽城郡の中心的な中生品種であると同時に、「早」稲作付地域（安山）と「晩」稲作付地区（水原）にも、それぞれの代表的な、早生品種、晩生品種として登場している。「多多稲」は、早、中、晩いずれの熟期にも適応できる、汎用性の高い、広域性を備えた品種であったことが判る。

上記2種以外では、その重要度はやや落ちるが、「晩」稲作付地帯（驍州郡および陽知郡）に名を連ねる「趙同知稲」（作付歩合は、それぞれ、55%、38%）と、同じく「晩」稲作付地帯2郡

表14：京畿道府郡の稲各種「作付歩合」の順位別平均

作付歩合順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
各順位作付歩合平均	48.7%	14.3%	7.6%	4.3%	2.1%	1.1%	0.6%	0.0%

(楊平および驪州)に登場する「順稲」(作付歩合は、それぞれ、32%、26%)が目につく。また、「早」稲作付地(積城郡)では、1例ではあるが、その作付歩合を65%とする「白川小禾稲」や、「中」稲作付地(坡州)の「西禾稲」(作付歩合43%)なども、地域特化型の稲種として注目できる。

表14は、この地域全体の特定品種栽培への集中の様子を探るために、作付歩合の記録から、京畿道各府郡稲種別作付面積上位8位までの作付歩合を取り出し、1位から8位それぞれの作付歩合の平均を見たものである。これによれば、作付面積1位の稲種の作付歩合は、平均48.7%であった。京畿道では、押し均て、作付面積の半分が特定の稲に傾斜して栽培を行なっていたことが判る。2位の稲の作付歩合の平均は1位の3分の1にも届かない14.3%、それを半減して3位(7.6%)、さらに4位(4.3%)、5位(3.1%)、6位(1.1%)と、第1位品種への集中度は突出している。また、1位、2位を合せて63%、上位3位までで70%と、稲作面積の大方が2、3の稲の栽培によっていたことが改めて明らかになる。その他の稲は多くても作付歩合が5%未満、大半の稲は2~3%の面積でしか栽培されない弱小品種もしくは作付歩合1%以下の「僅少」品種であった。

これに徴すれば、京畿道全体では、水稻、陸稻を含め38郡617種(延べ)の内、平均的には、上位1位38種が作付面積の約半分を占め、これに2位、3位を加えた上位3位までの稲数114種が作付面積の7割で栽培されていたことになる。したがってまた、残りの500種余が残る3割の作付面積で栽培されていた勘定である。

### ③稲の特性から見た在来稲(京畿道)の特徴

#### ア：稲の早晩

京畿道38府郡の早・中・晩比は、既述の通り、稲数ベースで30:35:35であった。3者、ほぼ相均衡した構成となっていた。一方、これを作付面積ベースで見ると、表13に示したように、中生の稲を基軸とした中・晩の作付体系を採っていたことが判る。『一覽』に記録された19府郡(38府郡中)の「作付歩合」を単純に平均すると、早13.8%:中40.9%:晩23.7%、であり、熟期の早い稲の作付は、限定的であった。

郡別に、面積ベースで早稲の作付が中・晩生の作付を凌駕した郡は、安山郡(早稲の作付比率は61%)と積城郡(同74%)の僅か2郡だけであった。しかしいま、これに中稲が主体であるが早稲の作付を第2位とする中・早作付体系を採る京城府、楊州郡、通津郡、陽城郡を加え、さらに、『一覽』に「作付歩合」の記載を欠くが、稲数ベースで熟期を「早」とする稲が「中」・「晩」を上回る

ことが判明している龍仁、朔寧、高陽、振威、漣川の各郡を加えた11郡を早稲もしくは準早稲作付地帯と見なすと、その裾野は臨海ないし沿岸地域に広がりを見せていたことが判る。

他方、晩稲の「作付歩合」が中・早稲のそれを圧倒する5郡：水原、楊平、驪州、麻田、陽知の各郡は、臨海の麻田を除いて、いずれも、京畿道南部の、平地から幾分山あいにかかる地に位置していた。これに、「作付歩合」の記載を欠くが晩稲の稲数が他を上回る竹山、安城、富平、金浦、喬桐 — 竹山を除き、いずれも、臨海 — の諸郡を加えると、晩稲作付地帯は、道南の山勝ち地区と臨海部に分布していたことが観察される。

以上から、全体として、この当時の京畿道では、道中央・平坦部の中稲栽培を基軸に、早、晩生の稲を臨海・沿岸部に、晩稲に関しては一部、平坦～山沿い地区、とに栽培を分化していた傾向を確認できた。

#### イ：耐旱力

『一覧』に記載のあった京畿道各稲（264種）の耐旱力について、それを「強」とする稲数は104種（39.4%）、それを「弱」とするものは160種（60.6%）あった。半数には及ばなかったものの、耐旱力の強い稲が多かったことに変わりはない。日本稲に比して耐旱性の強さは、朝鮮在来稲の大きな特徴とされている<sup>注9)</sup>。栽培されていた稲の耐旱性の強弱には、地理・地勢条件、気象条件、水利（整備）条件が強く関わっており、その中でも、気象条件に関し、朝鮮半島の降雨量の少なさを指摘できよう。朝鮮半島では稲作期間中（4～10月）の降雨量が少なく、とくに播種より挿秧までの降雨量は日本の6割にも及ばなかった。加えて、半島の水利環境＝施設の劣悪さを耐旱力のある稲が広く分布した背景として挙げることができる。昭和に入ってもなお、朝鮮全土の水田の内、水利の便あるものは3割にも満たなかったという。朝鮮独特の稲作法＝水利の便なき「乾水田」はもとより、水利の便ある水田でさえ、この時代、その多くが天水田化していたと言う<sup>注10)</sup>。

耐旱力「強」の稲数が「弱」のそれを大きく上回っていた郡の分布を見ると、耐旱性に優れた稲は臨海の豊徳、江華、金浦、富平、安山、南陽の諸郡、京城より北に並ぶ高陽、坡州、長淵、開城の諸郡、そして、南地域、山合いの陽城、利川、驪州の諸郡の3つの地区に分布していたことが判る。水利事情との関わりを中心に、今後審らかにしていきたい。

#### ウ：芒の有無

京畿道38府郡に登場した350種の稲の内、『一覧』は、313種について芒の有無を記録している。内訳は、芒を「有」とするもの251種（80.2%）、「無」とするもの62種（19.8%）であった。芒を有する稲が無芒種を圧倒している。すでに藩政時代後半には有芒種は少なくなっていた我が国と比べ、朝鮮半島の場合、事情は大きく異なっていたことになる。朝鮮の在来稲はなお野生稲の名残を有していた点が推察される。かつて、白米種に比べてより劣悪な環境でも一定の収量を期待でき、耐旱性、耐寒性に優れた赤米が朝鮮半島に数多く栽培され、近代に入っても白米種に混栽されていた

表15：芒の有無と耐旱力（京畿道）

	強（耐旱力）	弱（耐旱力）	合計
有芒種	91 (45.0%)	111 (55.0%)	202 (100%)
無芒種	12 (26.7%)	33 (73.7%)	45 (100%)
合計	103 (41.7%)	144 (58.3%)	247 (100%)

ことはよく知られているが<sup>注11)</sup>、この点、同じ古いタイプの稲とされる有芒種はどうであったか。一般に芒を有する稲は劣悪な栽培条件に耐性を持つと考えられているが、ここでは、前項で示した耐旱性との関わりを検討してみよう。表15は、稲の耐旱力の相違を有芒、無芒別に示したものである。

表より、有芒種では耐旱力の強：弱の比率は45：55と相半ばしていたのに対し、無芒種では、同比率は27：73であった。有芒種には耐旱力の強い稲が相対的に多かった結果と見るならば、有芒種が8割にも及んだ背景として朝鮮における降雨量の少なさと水利整備の全般的遅れを挙げることは十分の射た指摘と言えよう。

耐旱性に欠ける無芒種には、上記とは正反対の理由で、恵まれた水利環境適応型の、言わば日本的な集約型稲品種が多かったものと想像する。この時の無芒種の稲種数は僅かで、ごく限られた品種に特化した形で栽培が行なわれていたことを知る。すなわち、『一覽』（京畿道38郡）に登場した無芒種は延べ62種であったが、その内27は「趙同知稲」であった。この外、「玉山稲」（5郡に登場）、「紫来稲」（同3郡）、「七升稲」、「倭山稲」、「紅稲」（各2郡）、「倭山稲」、「倭野充稲」（各1郡）と、無芒種の数に限定されていた。「趙同知稲」は、したがって、限られた数の中での、この時期最大の代表的無芒種でもあったことになる。「趙同知稲」は、当時、在来種の中では日本稲に匹敵する収量を記録した数少ない朝鮮稲であり、整備された水利環境下ではじめて適応可能な、日本型に近い稲種であったものと想像する。その意味では、無芒種の中に「倭山稲」、「倭稲」、「倭野充稲」等の日本伝来の稲と思われる稲種が含まれていたことも注視しておくべきであろう。そもそも、「倭稲」が「趙同知稲二類似ス」とあるように<sup>注12)</sup>、「趙同知稲」が日本起源の稲であったことも十分考えられるのである。なお、「趙同知稲」27種の内、耐旱力を「強」とするものは7種に止まり、それを「弱」とするものは17種を数えた。

#### エ：粒の大小、粒付

表16に示したように、京畿道の在来稲には大粒種はほとんど見られず、中粒と小粒種が相半ばしていた。大粒種が主体であった藩政時代～明治前半の我が国（西日本）とは様相を異にしていた。一方、粒付に関しては、表17に示した通り、「中」が6割強、これに「密」（3割弱）、「梢密」（6.7%）が続く。粒付を「粗」とする稲は314例中僅か9例（2.5%）にすぎなかった。「中」を基

朝鮮在来稲の特色

軸とし、「密」の方に強く傾斜した粒体系を採っていた。「密」ないし「梢密」は我が国在来種に多く見られた、所謂「穂重型」の稲と想定されるが、いま、この「密」（「梢密」を含む）の稲数を先に示した京畿道主要稲17種（『一覧』出現回数4回以上）について見ると、表18のようである。この内、『一覧』出現頻度第2位の「麦稲」と第5位の「豆稲」は、それぞれ、20例中15例、11例中11例と、そのほとんどが粒付「密」＝穂重型の稲であったことが判る。こうした稲は、外に、「紅豆稲」（9例中7例）、「玉山稲」（7例中4例）、「象毛稲」（4例中4例）がある。一方、その他の稲は粒付を「密」とする事例は僅かであり、京畿道第1位品種「趙同知稲」は『一覧』に登場した27例に「密」のものは皆無であった。出現回数第2位の「老人稲」も同様であり、同じく2位品種「多多稲」についても、「密」の稲は20例中わずか2例に過ぎなかった。粒付を「密」とする稲数は京畿道全体で3割程であったが、上記の観察は、当時朝鮮において、穂重か否か、その形状は主要品種間で大きく異なっていた点を伝えている。また、粒付を「粗」（穂数型）とする稲数は、主要品種中僅か1例に止まった。穂重型から穂数型への方が集約稲作化の一般的パターンとの我が国の経験に照らし合わせるならば、朝鮮稲作においては、集約（穂数）型への移行はなお限定的であり、多くの稲は中立的で、非集約（穂重）型稲も依然3割を数える状況であった。

表16：粒の大小（京軌道）

	大粒	中粒	小粒	極小	合計
事例数	1	155	154	4	314
百分比	0.3%	49.4%	49.0%	1.3%	100%

表17：粒付（京畿道）

	密	梢密	中	粗	合計
事例数	85	21	199	21	314
百分比	27.2%	6.7%	63.6%	2.5%	100%

表18：主要品種の粒付（京畿道）

稲名	出現回数	「密」*		稲名	出現回数	「密」*	
趙同知稲	27	0		白稲	6	2	
老人稲	20	0		時不知稲	5	2	
多多稲	20	2		銀多多稲	5	1	
麦稲	20	15		荒稲	4	1	
豆稲	11	11		七升稲	4	0	
野充稲	11	2		斗充稲	4	2	
紅稲	9	7		戊戌稲	4	0	
精根稲	8	0		粳糯稲	4	0	
玉山稲	7	4		象毛稲	4	4	

注8)「作付歩合」の合計が比較的高い(「僅少」種を勘定に含めて10%以上に達すると思われる)郡は水原、広州、驪州、高陽、交河、陽知、陽城の各郡であるが、多くが地勢的には平坦部に位置し、また、都市・町場を擁する(もしくは隣接する)ところであったことが判る。加工原料としてとくに都市部に多く発生したであろう糯米需要に関する既述の1つの証左となる。

注9) 菱本長次『前掲書』p. 138。

注10) 穂本「前傾論文」p. 160。

注11) 穂本「上掲論文」p. 155。

注12) 穂本「上掲論文」p. 165。

#### 4. 結語

資料『朝鮮稲品種一覧』に基づく観察結果を要約すれば、以下の通りである。すなわち、

1. 『一覧』に各道各郡別に記載された稲の合計は3,792種と膨大な数にのぼった。稲の種類別内訳は、水稻・陸稲比は92:8、また、水稻3,486種の粳・糯比率を見ると、69:31であった。糯稲の数が水稻全体の3割と高かったが、これを作付面積ベースで見ると、『鮮米協会十年誌』(明治43年)、粳・糯比率は94:6と、糯の作付面積はごく限られていた。作付面積の割に稲数が多かったのは、主穀用の粳と異なり、糯稲は自家用としてどこでも、しかし小規模に栽培されていた結果であったと思われる。ただし、糯稲は加工用としても一部利用されており、都市、町場を多く擁する半島中・南部諸道で糯稲比率が全般的に高かったのはそのためと、との推測を生む。
2. 朝鮮全道における水稻の早、中、晩比率は、稲数ベースで、27.4:40.4:32.2であった。早がやや少なく、中を基軸に中・晩主体の稲種構成となっていたが、これを地域別にみると、早熟の比率には大きな差は見られず、地域差は中・晩の構成に生じていた。北部の諸郡ほど晩熟の稲が多く、この比率は南部ほど減少、代わって、中熟の稲が多くなる傾向が確認された。一般に稲の生育が気象条件に左右されることの多かったこの時代、春冷、秋冷が我が国より一段と厳しい半島では、北部ほど稲の登熟が遅れ、晩熟の稲が多くなるのは避け難かったものと思われる。

以下は、半島中央平坦部に位置する京畿道38府郡に関する観察結果の要約である。

3. 資料『一覧』(京畿道38府郡)に登場する稲数617種、内水稻は529種。水稻の内訳は粳350種、糯179種であった。これらは各府郡登場の稲を合計した結果であり、同種が複数回登場する場合も計算に含まれている。実際の稲数は、したがって、これより大幅にすくない100余種となるが、それでも一地域としては多すぎる稲数である。かつて、我が国藩政時代もそうであったが、品種の地域間の交流や品種改良への試みはなされているものの、その進行は遅かった。もとより、改良への統一基準や組織もなく、古いタイプの稲は、淘汰されることなくそのまま残存したのである。種々雑駁さはこの時代の稲種の在り方を特色付けている。『一覧』に登場する地名を冠した稲名、稲の形状(芒の有無・項の長短等)や稲の色状に纏わる稲名(「紅豆稲」、「紫来稲」、「毛緑稲」等)、熟期の早晩を伝える稲名(「山早稲」「早禾稲」、「暮稲」等)の多さが、この時代の”

雑駁なる”稲種の在り方を端的に物語る。

4. 反面、そうした中で、『一覽』（京畿道）に複数の府郡に跨って出現する稲（10回以上出現する稲）：「肖同知稲」、「老人稲」、「多多稲」、「麦稲」、「豆稲」、「野充稲」、もあった。この地域の有力品種と考えられる。また、これらの稲の中には、「多多稲」や「趙同知稲」の如く、同系種を多く有する稲もあり、多様な稲種の中にも、主力稲を基軸に、いくつかの系統が分化していた様子を窺い知る。なお、こうした特定品種への傾斜、分化は糯稲にも同様に見られていた。
5. 4に掲げた京畿道の主力6品種は『一覽』出現回数を基準にしたものだが、これを作付面積ベースで見ると、様相は異なる。出現頻度が最も高い「趙同知稲」は、作付比率を10%以上とする郡は10郡を数えたものの、高率を記録したのは2郡（それぞれ55%、38%）に止まった。「老人稲」、「豆稲」、「野充稲」も同様である。自然災害リスク回避のため、特定品種への過度の集中を嫌い、熟期を異にする数種の稲へ栽培を分散させる可能性がある。その点からすると、50%以上の高い作付面積比率を数郡について記録した「多多稲」と「麦稲」の方がむしろ、異例であったことになる。ともに平坦部に分布した、道内切っでの主要中・晩生品種であったと言えよう。
6. リスク回避のために熟期を分散させたであろう点を考慮し、特定品種への傾斜の程度を探るために、各府郡の早、中、晩別中心作期を構成する最大品種の作付比率を見ると、多くの郡において、それぞれの中心作期がわずかに1、2の特定品種の作付によって占められていたことが判明する。数多くの稲がある中で、実際にはやはり、限られた数の稲によってそれぞれの郡の作付体系を支えていたことを伝えてている。

稲の特性分析についての要約は、以下の通りである。

7. 京畿道の早、中、晩の構成比は、稲数ベースで30：35：35であったが、作付面積比率では、中生を基軸に中・晩を主体とした作付体系を採っていた。各稲は平坦部の中生種を中心に、臨海・沿岸部に早生種が分布し、晩生種は一部平坦部から山合いにかけても分布を広げていた。
8. 『一覽』（京畿道）に耐旱力を「強」とする稲は記載のある稲（264種）中4割に及んだ。我が国に比べ降雨量が極端に少ない朝鮮半島の気象条件と水利施設整備の不十分さがその理由であったものと推測する。その分布は臨海部、京城北側および道南部山合いにかけての諸郡に広がっていた。早稲の分布域と似通っているのは、早稲の挿秧期に降雨量が少ない半島の気象事情によるものとの推測を生む。
9. 芒の有無について、「有」とする稲は、記載のある313種の内251種、8割の高率に及んだ。藩政時代終期には有芒種がすでに少なくなっていた日本と比べ、朝鮮の稲はそれだけ野生稲の名残を有していたと判断される。一般に、野生に近い稲ほど劣悪な栽培条件に耐性を発揮するとされている。有芒種は無芒種に比べ耐旱性に優れていたことが判明した。反対に、無芒種は相対的に耐旱性に欠け、良好な水利条件に適応型の稲が多かったものと推察するが、京畿道62（延べ）の

無芒種の内27は「趙同知稻」で占められていた。同種は良質で収量水準も朝鮮在来稻としては際立って高い、当時の「優良品種」（＝日本稻）に近い稲であったことが興味深い。無芒種には、この外、「倭山稻」、「倭野充稻」といった日本起源の稲も名を連ねるが、ここでは、朝鮮在来稻の中から大型無芒種が出現した点に注目したい。

10. 京畿道の観察から、朝鮮在来稻には大粒種はほとんど無く、中粒、小粒が相半ばしていたことがわかる。一方、「粒付」については「粗」とするものは僅かで（9種、2.5%）、「中」（6割）を中心に「密」（3割弱）、「ヤヤ密」（7%弱）が続く。「密」は、我が国近代の品種改良の過程で次第に「穂数型」に置き換えられた、所謂「穂重型」と想定されるが、朝鮮では、なおこの「穂重型」（「密」ないし「ヤヤ密」）の稲が4割近く残っていたことになる。先に示した京畿道の主力稲種では、「麦稻」、「豆稻」は、多くの場合、「密」＝「穂重型」の稲として登場している。「趙同知稻」等その他の主力稲種は、粒付を「中」とする場合が多かった。

#### 観察結果から得られるインプリケーション

1. 種々雑多な稲が混在する朝鮮在来稻の中にいくつかの主要品種が登場し、さらに、それら特定品種に作付が相当程度集中していた事実は、品種改善・普及に向けての努力が、非組織的＝民間レベルではあったにせよ、着実に進行していたことを伝えている。また、各府郡がそれぞれの地勢や気象条件に応じた熟期の稲を主力品種として作付けていたことは、品種の早晩に関する地域間分化＝品種資源の適正な配分に対する努力が、経験的にはあるが、一定程度図られていたことを示している。

そうした反面、“雑駁なる”無数の稲が、十分淘汰されること無く、有力品種と混在していたことも事実である。また、大半の稲が芒を有する粗放な、古いタイプの稲種であり、収量向上を目指す集約栽培には支障が多い「粒密」＝「穂重型」の稲が多数残ったことも間違いない。しかし、これらの事実もまた、当時の朝鮮の稲作環境への適応の結果であった。特定品種への過度の集中は、当時の農業技術から見てリスクは大きく、中小・弱小品種との併植は不可避であった。有芒種は粗放であるが故に劣質な稲作環境に適応できた面に留意すべきである。有芒種が「耐旱力」に優れていた点はすでに述べた。日本に比して、もともと降雨量が少なく、なお且つ水利施設整備に遅れた朝鮮半島において、有芒種は適応品種であった。「穂重型」から「穂数型」への切換えは我が国の場合のように整備された耕地環境下での多肥栽培に適応する栽培パターンであり、少肥下の朝鮮においては分蘖が少なく、かえって、「穂重型」の方が安定した収量を確保できたものと思われる。

2. 日本の「稲の近代史」に照らし合せるならば、朝鮮の在来稻がなお多くの面で「粗放」段階にあったことは否めない。また、日本稻と朝鮮稻の最大の相違点は、その収量（反収）水準にある。

「趙同知稲」のように収量において日本稲に匹敵する朝鮮在来種も中にはあったがそれは例外で、両者の差は歴然としていた。しかし、朝鮮の稲が日本稲の「近代史」を辿る歴史的必然性はなく、したがって、両者の相違、差異を進歩の序列において捉えることは適切ではない。”進歩の序列”に代わる枠組として、ここでは、双方の土地の相対賦存度の変化に伴う技術進歩の在り方の違いが、稲の品種の特性や生産性の開差の背景にある、との立場を提示したい。日本では、人口の増加に伴って土地の相対賦存量が低下し、その結果、土地の生産性向上の必要から多肥多労型農業が推し進められるとともに、肥料や労働生産性の逡巡回避のための技術進歩（多肥＝耐肥性品種改良と肥培技術の前進）および耕地整備事業が必然化した。他方、人口に比して耕地に余裕のあった朝鮮ではかかる人口圧力が相対的に小さく、その分、技術進歩も小さく、耕地整備事業も遅れた。日本稲との対比において明らかにされた朝鮮在来稲の特色は、そうした稲作環境の在り方の相違を反映したものと捉えるべきであろう。

3. 朝鮮在来稲は、『一覽』の調査（明治44年～大正元年）からわずか10年後には、日本の「産米増殖計画」（大正9年実施）の下、一部を除き、日本稲に悉く置き換えられていった。肥料の大量投入と灌漑整備とともに、日本の農業制度：農事試験・普及組織、の下、集約栽培に適した「優良品種」（日本稲）が移植されたのである。わずか20年間に朝鮮在来稲の8割が日本稲に置き換えられたと言う。それは、半島の土地と人口の賦存状況とは関わりなく、日本の論理：日本における人口増加と農業成長力低下による食糧危機の回避、の半島における貫徹、すなわち、“稲の植民地化”の本各化である。